

第 6 回 HOPE meeting 終了報告書

所属・学年	総合理工学研究科 化学環境学専攻、 博士後期課程 2 年
プログラム名	JSPS 6 th -HOPE meeting
プログラム期間	平成 26 年 3 月 11 日(火)~15 日(土)
開催地	グランドプリンスホテル新高輪 (東京都港区)
参加者	アジアの博士後期課程の学生と研究員 110 名程度
使用言語	英語

1. プログラムの概要

今回の HOPE meeting は物理、化学、生理学、医学(関連分野)という様々なバックグラウンドを持った博士後期課程学生、もしくはポスドクの研究者が 110 名程集まり行われました。プログラムはノーベル賞受賞者の講演、ノーベル賞受賞者と学生 15 人程が集ってのグループディスカッション、ポスター発表、さらにグループプレゼンテーションを行うという様々な講演、課題がありました。

2. 事前準備の内容

①ポスター発表

参加者全員が各自行っている研究内容についてポスター発表を行うというものです。そのため、多彩なバックグラウンドを持つ参加者にわかりやすいポスターを英語で作成し、発表の準備をしました。また、自分のポスターの内容をミーティングの一日目に一分間という短い時間で説明する Flash Talk のパワーポイントのスライドを用意しミーティングが始まる前に JSPS へ送りました。

②ノーベル賞受賞者への質問

参加者は自分のグループディスカッションで話をしたいノーベル賞受賞者の希望を出し、更にグループディスカッションで質問したいことをミーティング参加前に考え、その質問内容を JSPS に送りました。

3. プログラム期間中の内容

①ノーベル賞受賞者の講演

日本人としては小林誠博士、根岸英一博士の二人が講演を行い、外国人の受賞者としては Brian P. Schmidt 氏、Martin Chalfie 氏、Richard J. Roberts 氏の三人に加えて前スウェーデンアカデミー事務総長の Gunnar Öquist 氏、倫理学者の

Suzanne Shale 氏が講演を行いました。ノーベル賞受賞者は、自分がやってきた研究内容やノーベル賞の対象となった研究の当時の状況から研究に対する哲学まで様々な内容をお話くださいました。更に、Gunnar Öquist 氏は研究者への科研費の割り振り等を決めていた時の経験から、研究テーマの設定の仕方や採択基準を具体的に話してくれ、今後の研究活動に非常に有益でした。更に、倫理学者の Suzanne Shale 氏は科学研究の倫理について、以前に行われた不正な研究例を取り上げてどのようなことに気を付けて、より純粋で公平な科学研究を遂行していくかについて講演してくださいました。

②講演者の先生方とのグループディスカッション

ノーベル賞受賞者の先生方を参加者 15 人程度で囲んで座りフリーディスカッションを行いました。講義形式でなく近くでノーベル賞受賞者とのディスカッションが行えたため、大変質問がしやすい環境でした。質問内容としては、受賞者がなぜ科学の研究を始めたのかからノーベル賞を行った研究内容等から始まり、Chalfie 先生に至ってはポストク先に申し込む時に送るメールの内容、出し方や博士課程終了後のテーマ設定、進路に関する考え方に至るまで本当に親切にアドバイスをしてくださいました。

③参加者によるポスター発表

まず初日にポスター発表の紹介を各参加者が一分以内で行う Flash Talk が行われ、各参加者がポスター発表の概要を説明しました。その後に三日間に分けてポスター発表が行われました。異なる専門の研究者の研究内容を聞くことができ視野が広がるとともに説明の仕方に関しても学ぶことが多かったです。



④グループプレゼンテーション

各国の参加者が事前に 8 人前後のグループに分けられ、そのメンバーでテーマについて考え、話し合いを行い最終日に 10 分間のプレゼンテーションを行いました。今回は”Science Meets Society”というテーマで、科学と社会との関わりについて様々な観点からプレゼンテーションが行われました。各チームが工夫した発表をしており、多くの日本人が苦手とする聞き手を楽しませるユーモアの

あるプレゼンテーションが行われました。



⑤研究施設見学

三日目の午後に茨城県つくば市にある KEK(高エネルギー加速器研究機構)と NIMS(物質・材料研究機構)に行き、研究施設を見学しました。KEK では加速器の動作原理や加速器を利用した様々な研究内容を、NIMS ではより応用に近い段階での材料開発に関する説明を研究者の方から聞き、更に研究施設を案内して頂き普段見ることができない大規模な測定機器を見ることができました。普段接する機会の無い研究員の方々から興味深いお話を聞くことができ、非常に刺激になりました。

⑥文化プログラム

文化プログラムとしてはコンサートと文化体験プログラムが含まれていました。コンサートでは三味線、琴、尺八といった日本の伝統的な楽器での演奏からチェコ、バイオリンによるビートルズの”Let it be”の様な親しみのある曲を鑑賞することができました。また、文化体験プログラムでは「Japanese Calligraphy」, 「Wearing Kimono」, 「Ikebana(flower arrangement)」, 「Tea Ceremony」の4つの中から各自の希望するコースを体験することができ、私は「Tea Ceremony」を体験しました。ノーベル賞受賞者の Chalfie 教授も「Tea Ceremony」に参加しており興味深そうに体験されていました。



⑦東京観光

最終日の午後、バスで浅草を観光しました。東京タワーやスカイツリーを見て、両国国技館に行き、お昼ご飯にちゃんこを食べました。箸を使うのが初めてという参加者も一生懸命に箸でご飯を食べていて、スプーンを使わないのかと訊いても箸で頑張る様子は少し面白かったです。その後に、お台場にある日本科学未来館に行きました。最終日ということもあり、皆少し疲れている様子でし

たが、初めて見るものばかりでそこかしこの写真を撮っていたのが印象的でした。

4. 感想

本会議では主にアジアの地域から約 110 人のポスドク、博士課程大学院生が集まり、ノーベル賞受賞者の講演、グループディスカッションを行いました。また、学生が主体的に行っていくプログラムとして、ポスター発表やグループプレゼンテーションがありました。

幸運なことに、私が参加した今回の HOPE meeting は初の 4 分野合同での開催となり、自分と全く異なる専門分野の研究者と話ができ非常に刺激的で貴重な経験になりました。特に、宇宙論を専門にしている研究員の方に宇宙の成り立ちやノーベル賞についての話を聞いた直ぐ後に、日本人の研究者が提唱したインフレーション理論を裏付ける重要な実験結果が見つかったという論文が発表され、タイムリーだと驚くと同時に、分野は違いますが同じ日本人として非常に嬉しく思いました。こういった科学的な話題のみならず、基礎研究を続けていく上での進路選択についても研究員として働いている方や、自分と同じ博士後期課程に属している友人の話を聞いたことは、自分の研究者としてのキャリアを考える上で非常に参考になりました。

ノーベル賞受賞者の講演、ディスカッションについては、ノーベル賞に繋がる研究がどういった状況でなされていったのかということや、それぞれの先生方の研究に対する哲学のような深い話も聞くことが出来ました。また、実際にポスドクとして研究室にメールを送る時の注意点から通りやすい科研費の申請書の書き方まで、今後研究活動を続けていく上で必要な多くの情報も得られ非常に参考になるプログラムでした。

グループプレゼンテーションでは準備の段階でアジアの他の国の参加者とともに科学と社会の繋がり、問題点について話し合いを行い自分の英語力のなさを実感しました。また、本番のグループプレゼンテーションでは、発表の仕方に関しても各チームが聞き手の楽しめるわかり易いプレゼンテーションをするために様々な手法や工夫を取り入れていたことに感心するとともに、見習わなければいけない姿勢であると感じました。

今回 HOPE meeting で得た仲間や様々な経験を大切にすることはもちろん、研究を通じてそれらを社会の問題解決にどう繋げていけるかを考えていかなければと決意を新たにしました。

最後に、今回の会議でお世話になった JSPS や留学生交流課の方々、そして日々の研究指導でお世話になっている山元先生、今岡さん、アル建さんをはじめ本ミーティングで不在時に仕事を押し付けてしまった研究室の後輩達に心から感謝します。

